

# 短大生の調理教育に関する研究

## Survey on Cooking Education for Junior College Students

中 村 喜代美\*<sup>1</sup> 新 澤 祥 恵\*<sup>2</sup>

### Abstract

As a step in the consideration of cooking education at junior colleges, students (178) who were admitted to junior colleges in 2007 and 2008 were compared with those (193) who had been admitted in 1994 and 1995. The survey covered whether they took part in home cooking and their feelings and attitudes toward cooking and food. Compared with the latter group, the former group had a considerably larger number of students who were interested in regional and traditional cuisines. In contrast, a higher ratio of the former group did not cook by themselves as frequently as the latter group. The data showed that junior college students of the former group with high awareness of food and cooking tended to engage themselves in actual cooking less frequently. The survey result revealed an important issue that future cooking education should be linked to cooking practice.

キーワード：調理教育／食育／食生活

### I はじめに

食育基本法が平成 17 年 7 月 15 日に施行され、従来の知育、徳育、体育という教育 3 本柱に食育が加えられた。食育基本法には「健全な食生活を実践することができる人間を育てる、これが食育である」とある<sup>(1)</sup>。この基本理念を実現する為に国・都道府県・市町村、公共団体で推進体制を整備し運動を進めているが<sup>(2) (3)</sup>、我々は食育の中での重要な課題である食の安全性や地元の食材を使った伝統食・行事食の指導、食べ物に感謝して食べること、食のマナーなどを以前から取り上げ教えてきたところである。本学紀要 28 号では、学生は、入学時調理に対する意欲や関心は比較的高い者が多いが、調理技術は未熟であった。その理由として主婦の調理離れが進み、<sup>(4) (5)</sup> 家庭内食の減少、家庭外食の増加、また、子どもの生活においても受験勉強やクラブ活動などの比重が高く

なることから、調理への参加度や関わり方が低いものと推察した<sup>(6) (7) (8)</sup>。しかし、子供の頃より経験を繰り返す反復訓練を日常的に繰り返すことが調理の上達に大変重要であることを踏まえ、学生が少しでも家庭で調理に向き合うことができるように、また、食育で取り上げている健全な食生活を実践できる能力を取得するために、授業をどのように進めるか模索を続け、そのための家庭における調理実態調査を続けてきた。

食育基本法などにより食への関心が高まる一方で、食の社会化、調理の簡便化が進み、調理への関わりが希薄になっていることも指摘されているが、本報は、短期大学における調理教育を考える一助とするため、短大入学生の食生活状況や調理への態度、調理能力等の検討を行ったものである。

### II 研究方法

#### 1. 調査対象と調査時期及び方法

2007 年と 2008 年入学生(計 178 名)を対象とし、自己記入法によるアンケート調査を第 1 回目の授業時に調査用紙を配布、記入後即時回収した。

\*<sup>1</sup> Kiyomi NAKAMURA  
北陸学院大学短期大学部 食物栄養学科 調理学実習  
\*<sup>1</sup> Yoshie NIIZAWA  
北陸学院大学短期大学部 食物栄養学科 調理学

## 2. 調査内容

家庭における調理実態や調理・食への意識態度などについて質問し、さらに料理 51 品目の調理歴についても質問した（表 1）。

## 3. 検討項目

### (1) 調査対象の概況

(2) 家庭での料理への参加状況、食や調理への意識状況の比較、食傾向、食事状況、食生活の満足度と豊かさ、調理歴

尚、調査結果の検討にあたっては、一部、1994 年と 1995 年入学生（計 193 名）との比較を行った。

表 1 家庭における調理実態についての質問事項

#### I. 家庭状況

- |              |         |                 |
|--------------|---------|-----------------|
| 1、家族形態       | a、核家族世帯 | b、拡大家族世帯        |
| 2、家の職業       | a、農家世帯  | b、自営業世帯 c、勤労者世帯 |
| 3、調理担当者の就業状況 | a、無職    | b、有職            |

#### II. 調理実態に関する質問

- 1、あなたは家で料理をよくしますか。 a、よくする b、たまにする c、殆どしない
- 2、あなたは家で食事を作ることにどの位加わっていますか。  
a、家族に代わり主となって作る b、家族が作るのを手伝う c、殆どしない
- 3、あなたは家でどの位の頻度で料理をつくりますか。  
a、殆ど毎日 b、1 週間に 3～4 回 c、1 週間に 1～2 回 d、1 ヶ月に 1～2 回
- 4、あなたは料理をすることが好きですか。 a、好き b、嫌い c、普通
- 5、料理について、雑誌やテレビなどに興味を持っていますか。  
a、いつも興味を持っている b、時々興味を持つ c、あまり関心がない
- 6、お母さんやお祖母さんから料理を習うことがありますか。  
a、よく習う b、たまに習う c、殆ど習ったことはない
- 7、郷土料理や伝統食に興味がありますか。 a、ある b、ない
- 8、食品の買物によく行きますか。 a、よく行く b、時々行く c、殆ど行かない
- 9、あなたの家では和風のもの、洋風のもの、どちらの献立が多いですか。  
a、和風のもの b、洋風・中華風のもの c、半々位
- 10、あなたは食べ物では和風のもの、洋風のものどちらが好きですか。  
a、和風のもの b、洋風・中華風のもの c、どちらともいえない
- 11、あなたは和風のもの、洋風のものどちらをよく食べますか。  
a、和風のもの b、洋風・中華風のもの c、半々位
- 12、朝食は家族と一緒に食べますか？  
a、いつも一緒に食べる b、時々一緒に食べる c、一緒に食べない
- 13、夕食は家族と一緒に食べますか？  
a、いつも一緒に食べる b、時々一緒に食べる c、一緒に食べない
- 14、食事の時、いつも挨拶（いただきます、ごちそうさま）をしますか。  
a、必ずする b、時々する c、殆どしない
- 15、食事はいつも規則正しくとっていますか。  
a、いつも規則正しく食べている b、時々不規則になる c、いつも不規則である
- 16、あなた自身の食生活で気をつけていることがありますか。 a、ある b、ない
- 17、あなたは日々の食生活を豊かだと思えますか。  
a、大変豊かだと思う b、まあまあ豊かだと思う c、あまり豊かでない
- 18、あなたは日々の食生活に満足していますか。  
a、大変満足している b、まあまあ満足している c、あまり満足でない

## Ⅲ 結果と考察

## 1. 調査対象の概況

表2に、1994、1995入学生と2007、2008入学生、調査対象の概況を示した。尚、調査対象について、以降1994・5入学生、2007・8入学生とする。  
まず、家族形態では「拡大家族」が1994・5入

学生では45.8%に対し、2007・8入学生では43.3%と若干少なく、反対に「核家族」は1994・5入学生では54.2%に対し、2007・8入学生では56.7%と僅かに多くなっており、核家族化が進んでいることが伺えた。次に、職業形態では、1994・5入学生では「農業世帯」14.1%、「自営業

表2 質問項目の回答数

アイテム	カテゴリー	*p<0.05 **p<0.01			
		2007、2008入学生		1994、1995入学生	
		人数(人)	比率(%)	人数(人)	比率(%)
家族形態	核家族	101	56.7%	104	54.2%
	拡大家族	77	43.3%	88	45.8%
家の職業形態	農家世帯	11	6.2%	27	14.1%*
	自営業世帯	27	15.2%	44	22.9%
	勤労者世帯	140	78.7%	121	63.0%
主婦就労状況	無職	35	19.7%	45	23.6%
	有職	143	80.3%	146	76.4%
料理の度合	よくする	31	17.4%	32	16.7%
	たまにする	107	60.1%	129	67.2%
	殆どしない	40	22.5%	31	16.1%
料理とのかかわり	主に作る	22	12.4%	23	12.0%
	家族の手伝い	125	70.2%	144	75.4%
	殆どしない	31	17.4%	24	12.6%
料理作りの頻度	殆ど毎日	16	9.0%	26	14.8%**
	週3～4回	26	14.6%	48	27.3%
	週1～2回	69	38.8%	68	38.6%
	月1～2回	27	15.2%	21	11.9%
	殆どしない	40	22.5%	13	7.4%
料理作りの好き嫌い	好き	110	61.8%	103	53.9%
	普通	66	37.1%	84	44.0%
	嫌い	2	1.1%	4	2.1%
料理情報への関心	常に関心	57	32.0%	59	30.4%
	時々関心	113	63.5%	124	63.9%
	関心なし	8	4.5%	11	5.7%
料理の伝承	よく習う	14	7.9%	35	18.2%*
	たまに習う	124	69.7%	130	67.7%
	殆ど習わない	40	22.5%	27	14.1%
郷土食等への関心	ある	131	73.6%	93	48.7%**
	ない	47	26.4%	98	51.3%
買い物	よく行く	67	37.6%	63	32.8%
	時々行く	87	48.9%	101	52.6%
	殆ど行かない	24	13.5%	28	14.6%
多い献立	和食中心	52	29.2%	59	30.7%
	洋食・中華	18	10.1%	8	4.2%
	半々位	108	60.7%	125	65.1%
好きな食事	和食中心	53	29.8%	50	26.2%
	洋食・中華	59	33.1%	54	28.3%
	どちらでもない	66	37.1%	87	45.5%
よく食べる食事	和食中心	39	21.9%	44	22.9%
	洋食・中華	39	21.9%	35	18.2%
	半々位	100	56.2%	113	58.9%
家族と食事(朝食)	いつも一緒	37	20.8%		
	時々一緒	67	37.6%		
	一緒に食べない	74	41.6%		
家族と食事(夕食)	いつも一緒	87	48.9%		
	時々一緒	76	42.7%		
	一緒に食べない	15	8.4%		
食事時の挨拶	必ずする	85	47.8%		
	時々する	67	37.6%		
	殆どしない	26	14.6%		
食事規則的か	常に規則的	67	37.6%	74	38.5%
	時々不規則	102	57.3%	111	57.8%
	常に不規則	9	5.1%	7	3.6%
食生活の注意点	ある	136	76.4%	104	54.2%**
	ない	42	23.6%	88	45.8%
食生活の豊かさ	大変豊か	66	37.1%		
	まあまあ豊か	100	56.2%		
	あまり豊かでない	12	6.7%		
食生活の満足度	大変満足	49	27.5%		
	まあまあ満足	104	58.4%		
	あまり満足でない	25	14.0%		

世帯」22.9%いたが、2007・8入学生では「農業世帯」6.2%、「自営業世帯」15.2%と減少し、反対に、「勤労者世帯」では、1994・5入学生 63.0%に対し、2007・8入学生では 78.7%と増加していた。また、調理担当者の就労状況では「有職」のものが1994・5入学生 76.4%に対し、2007・8入学生では 80.3%と多くなっていた。以上のように、「勤労者世帯」の比率が前回調査より多くなり、調理担当者の就労状況で、「有職」のものが若干増加していた。

## 2. 質問項目と入学生との関連

表2は、1994・5入学生と2007・8入学生の質問項目の回答を示したものである。各項目のカテゴリと1994・5入学生と2007・8入学生をカイ2乗統計量により、有意差検定を行った。

表1で有意差があった項目は、家庭状況では、「家庭の職業形態」、家庭での調理状況では、「料理作りの頻度」や「料理の伝承」、また、食や調理への意識では「郷土料理への関心」、「食生活への注意の有無」において関連がみられた。そこで関連があった項目と有意差はなかったが、少し変化が見られた項目について検討を行った。

### (1) 調理状況との関連

家庭での調理状況では、「料理とのかかわり」や「料理の伝承」に関連がみられた。このほか「料理とのかかわり」「買い物」についても取り上げた。(図1. 2. 3. 4)

最初に「料理作りの頻度」との関連では「殆ど毎日」と答えたものは、1994・5入学生が14.8%に対し、2007・8入学生では9.0%と低く、また「週に3～4回」では1994・5入学生が27.3%に対し、2007・8入学生では14.6%と同様に低くなってい

た。また「殆どしない」ものは1994・5入学生が7.4%に対し、2007・8入学生では22.5%と高くなっていた。調理頻度では、料理作り頻度の多い「殆ど毎日」、「週に3～4回」のものが減少し、「殆どしない」ものの比率が増えていた。(図1)

次に「料理の習得状況」では、「よく習う」と答えたものは、1994・5入学生が18.2%に対し、2007・8入学生では7.9%と減少し、また、「殆ど習わない」ものは1994・5入学生が14.1%に対し、2007・8入学生では22.5%と増加していた。

調理の習得についても、「よく習う」というものが減少し、家族との関わりが希薄になっていることが伺えた。(図2)

調理状況との関連の中で、有意差はないが、少し変化が見られたものに「調理への関わり方」がある。「主に作る」と答えたものは、1994・5入学生 12.0%、2007・8入学生の比率は12.4%と僅かに増加していたが、「殆どしない」ものは1994・5入学生が12.6%に対し、2007・8入学生では17.4%と多くなっていた。以上のように、調理への関わり方では、「主になって作る」ものの比率は変わらないが、「手伝う」というものの比率が若干減少していた。(図3)

(図4)は「買い物」との関連をみたものであるが、「よく行く」と答えたものは1994・5入学生は32.8%に対し、2007・8入学生では37.6%と関連はないものの買い物に「よく行く」ものが若干多くなっていた。

### (2) 食生活や調理への意識との関連

食や調理への意識では、「伝統食への関心」や「食生活への注意の有無」に関連がみられた。このほか関連はないが、「調理情報への関心」について

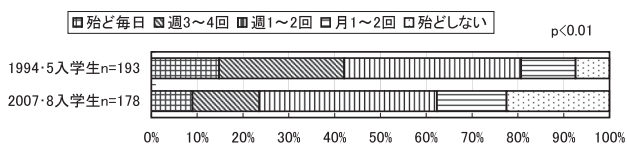


図1 調理頻度

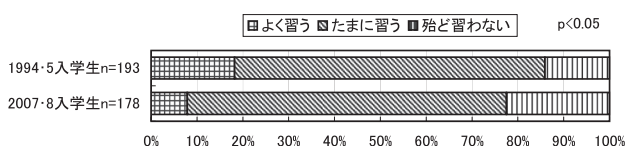


図2 調理の習得状況

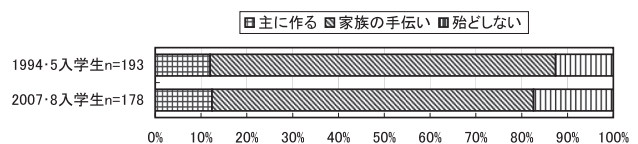


図3 調理への関わり方

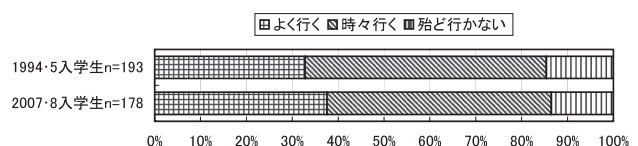


図4 買い物状況



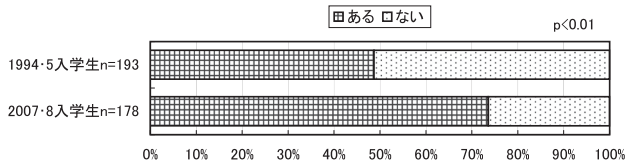


図5 郷土食・伝統食への関心

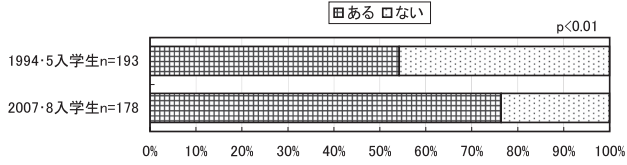


図6 食生活への注意の有無

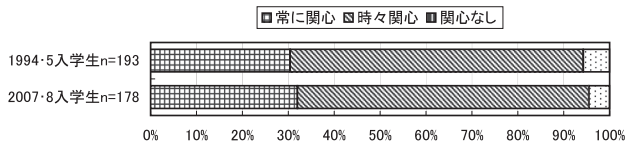


図7 料理情報への関心

も取り上げた。(図5. 6. 7)

まず、「伝統食への関心」では有意差がみられた。「関心がある」と答えたものは、1994・5入学生が48.7%と半数のものに対し、2007・8入学生では73.6%の3/4のものが伝統食に関心があると答えた。近年、食育で食文化の継承といった視点での取組がなされてきたことによるものと推察される。(図5)

次に、「食生活への注意の有無」についても関連が見られた。食生活への注意については「注意をしている」というものは、1994・5入学生では54.2%と半数のものが答えたのに対し、2007・8入学生では76.4%とこれも3/4以上の多くのものが食生活への注意をしていると回答しており、食への意識は高くなっていることが伺えた(図6)

図7は「料理情報への関心」との関連をみたものであるが、1994・5入学生・2007・8入学生とも「常に興味」のあるものが若干増加傾向であるが、有意差はなかった。

食育基本法が施行され、それに先立ち4月から栄養教諭制度も発足した。食を通じて心身の健康を保つことや農業・漁業・酪農を通じて食べ物の大切さ・命の営みの大切さ、また、地産地消の推進など教育現場、公共の施設、テレビ、新聞、雑誌等で啓蒙している。このため伝統食への関心や食生活への注意などは、ほとんどのものが周知しているようである。しかし、近年の家庭における

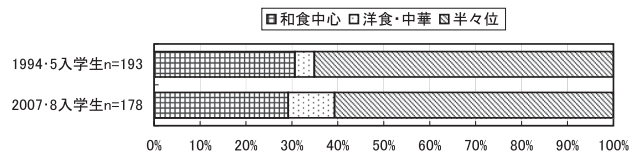


図8 家庭で多い献立

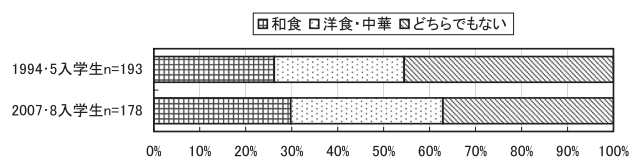


図9 好きな献立

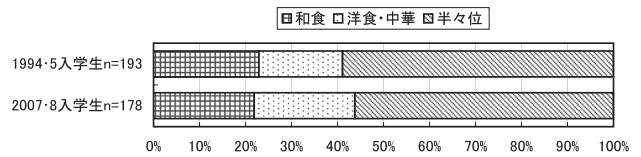


図10 よく食べる献立

調理簡便化傾向、あるいは、食の外部化を反映してか、料理作りへの関心はそれほど高くはなかった。

### (3) 食傾向の変化

調査項目の中で「家庭で多い献立」、「好きな食事」、「よく食べる食事」はどれも有意差はみられなかった。(図8. 9. 10)

はじめに、「家庭の食卓に多く出される献立」では「和食中心」と答えたものは、1994・5入学生が30.7%に対し、2007・8入学生では29.2%と減少したが、反対に、「洋食・中華」では1994・5入学生が4.2%に対し、2007・8入学生では10.1%と増加し13年前に比べ欧風化傾向が伺えた。(図8)

次に「好きな献立」では「和食」と答えたものは、1994・5入学生が26.2%に対し、2007・8入学生では29.8%と増加した。また、「洋食・中華」と答えたものは、1994・5入学生が28.3%に対し、2007・8入学生では33.1%と少し「洋食・中華」を好むものが多くなっていた。(図9)

また、学生の「よく食べる献立」では、「和食」というものは、1994・5入学生が22.9%に対し、2007・8入学生では21.9%と僅かに減少した。反対に、「洋食・中華」と答えたものは、1994・5入学生が18.2%に対し、2007・8入学生では21.9%と少し増加しており、実際食べている食事についても以前に比べ「洋食・中華」が増加傾向であ

った(図10)。

以上のように、食傾向では、家庭で多い献立、よく食べる食事、好きな食事、洋・中華風の料理が若干増加傾向であり、食の欧風化傾向が伺えた。

#### (4) 食事状況

朝食の食事状況、夕食の食事状況、食事時の挨拶で家族とどのようにに関わりがあるか検討した。

まず、朝食において常に孤食のものが4割を超えており、常に家族と一緒に食事をするものは2割に過ぎなかった。又、夕食においても常に家族と食事をするものは、半数以下となっていた。次に、食事の時の挨拶では、半数のものは必ず挨拶をするが、1割以上のものが殆ど挨拶をしないと答えた。(図11. 12. 13)

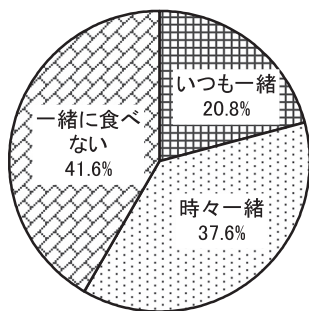


図11 朝食の食事状況

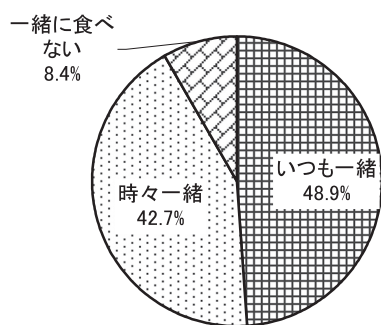


図12 夕食の食事状況

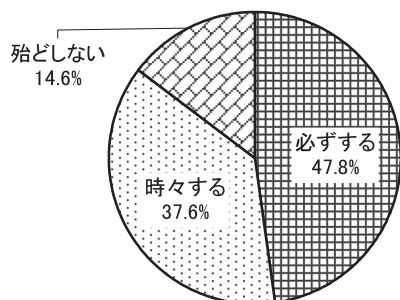


図13 食事時の挨拶

平成17年度国民栄養の現状で朝食状況<sup>(9)</sup>をみると「子供だけで食べる」と答えたものは、小・中学生の4割以上と非常に多くなっていた。これは昭和63年、平成5年、平成17年と徐々に増加傾向を示し、平成17年では小・中学生共に4割以上のものが、子供だけで食べていた。また、このうち1人で食べるものは、小学生では1割以上のものが、中学生では2割以上のものが孤食であった。このことは、本学短大生でも同様の傾向であった。

以上、今回の調査でも日本の食卓の現状が反映されたが、大切な家族の関わりを疎かにすることから、様々な問題を招いていることが推察され、食育を通して、家族で食事を囲む楽しさや会話をする事で家族の絆を深めることができることも教えていく必要があることを痛感した。

#### (5) 食生活の満足度と豊かさ

食生活の豊かさ感と食生活の満足度がどのようにに関わりがあるか、その関係をみた。

図14は、食生活の豊かさ感をみたものである。「大変豊か」と「まあまあ豊か」を合わせると93%と非常に多くのものが食生活に豊かさを感じていた。

次に食生活の満足度をみた。「大満足」と「まあまあ満足」を合わせると満足度に関しても86%と同様に高くなっていた(図15)。

図16は、食生活の豊かさ満足度との関係をみたものである。「あまり豊かではない」と考えているものの中にも「まあまあ満足」しているものが16.7%もいたが、反対に「まあまあ豊か」というものの中には「あまり満足でない」と答えたものが8.0%もいた。さらに「大変豊か」と答えているにも関わらず、「満足していない」ものが10.6%と増加していた。満足度は食生活が豊かであるか、否かで決まるものではないことが伺えた。それは、家庭での「調理状況の関わり」や「食生活や調理への意識」、「朝・夕の食事状況」での親子の触れあい、「和・洋・中の食事の傾向」などその他いろいろの要因が複雑に絡み合い食生活が満足できるかどうかを感じられるのではないかと推察した。

#### (6) 調理歴

以上の家庭における調理実態の質問と併せ、

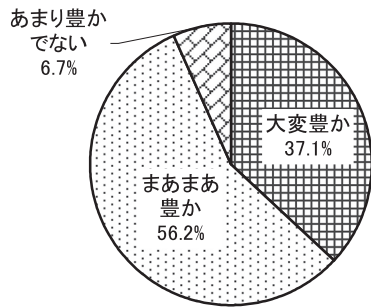


図14 食生活の豊かさ感

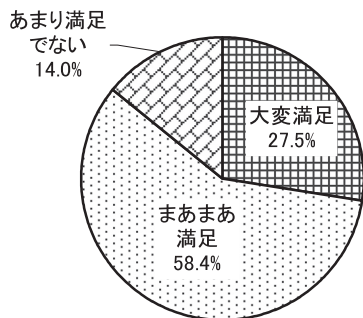


図15 食生活の満足度

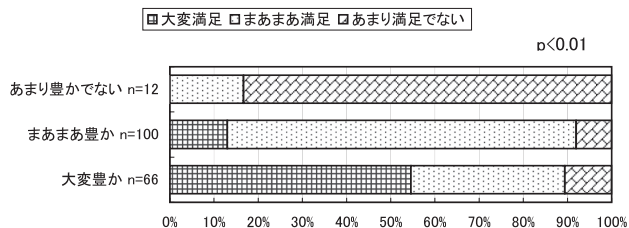


図16 食生活の満足度と豊かさ感

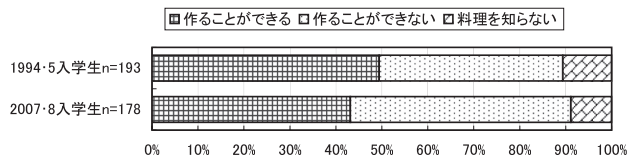


図17 調理歴

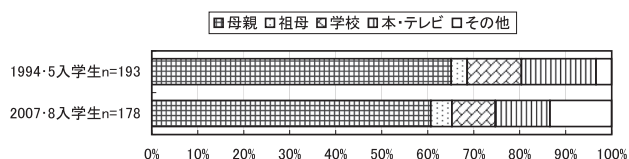


図18 調理の情報源

1994・5入学生の調査と同様<sup>(8)</sup>、料理及び菓子51品目について、「自分で作ることができるか」ということと、自分で作ることができる場合、その情報源を質問した。図17は、料理及び菓子51品目全体の比率を調理経験の関連でみたものである。

調理経験で1994・5入学生では「作ることができる」と答えたものは49.3%に対し、2007・8入学生は43.2%と低くなっていた。また、1994・5入学生は「作ることができない」と答えたものは40.0%に対し、2007・8入学生では48.0%と高くなっていた。

図18は調理技術習得の情報源をみたものである。1994・5入学生で「母親」から習ったものは65.1%に対し、2007・8入学生では60.7%と低くなっていた。次に、「学校」で習ったと答えたものは1994・5入学生では11.8%に対し、2007・8入学生では9.4%と低くなっていた。また、「本・テレビ」から習得したと答えたものも1994・5入学生では16.2%に対し、2007・8入学生では11.8%と同様に低くなっていたが、その他に関しては1994・5入学生で「その他」からというものが3.4%に対し、2007・8入学生では13.4%と高くなっていた。「その他」についてはインターネットからというものもあり今後調査を広げる必要がある。

#### Ⅳ まとめ

① 家庭環境では、「勤労者世帯」の比率が多くなり、調理担当者の就労状況で、「有職」のものが若干増加していた。

② 家庭における調理頻度では、「殆ど毎日」や「週3～4回」というものが減少し、「月1～2回」や「殆どしない」などの調理をしないものの比率が増えていた。調理への関わり方では、「主になって作る」ものの比率は変わらないが、「手伝う」というものの比率が若干減少しており、調理の習得についても、「よく習う」というものが減少し、家族との関わりが希薄になっていることが伺えた。ただ、買い物状況では「よく行く」ものが若干増えていた。

③ 調理への意欲や関心についてみると、調理情報に関心のあるものが若干増加傾向であり、特

に、郷土食・伝統食への関心については、「ある」ものが1994・1995年入学生では半分以下であったが、今回の調査では3/4を占めており、近年、食育で食文化の継承といった視点での取組がなされてきたことによるものと推察される。また、食生活に注意しているかについても、同様に「注意している」ものは1994・1995年入学生では約半数であったが、今回は3/4を超えており、意識のみは高くなっていることが伺えた。

④ 食事内容を見ると、家庭で多い献立、よく食べる食事、好きな食事とも、洋・中華風が若干増加傾向であり、食の欧風化傾向が伺えた。

⑤ 食事状況では、朝食において常に孤食のものが4割を超えており、常に家族と食事をするものは、2割に過ぎなかった。夕食においても、常に家族と食事をするものは、半数以下となっており、朝食・夕食とも孤食傾向が伺えた。

⑥ 食生活の豊かさや、満足度をみたところ、食生活の豊かさでは大変豊かとまあまあ豊かを合わせると8割以上を超えている。また、食生活の満足度でも8割以上と多い。しかし、食生活の豊かさや、満足度が高いものは多いが、「大変豊か」というもののものの中に、「満足していない」ものもみられた。

⑦ 料理の調理歴をみたところ、全体では、「作

ることができる」もの43.2%、「作ることができない」もの48.0%、「どんな料理か知らない」ものの8.9%で、前回の調査ではそれぞれ、49.6%、40.0%、10.6%であった。

⑧ 以上より、今回の調査対象では、以前に比べ、食や調理の意識は高いものの、実際の関わりは希薄になる傾向であり、今後の調理教育において、実践へと結びつけることが大きな課題であると考えた。

---

#### <参考文献・引用文献>

- 1) 香川靖雄 2005「食生活 10月号」出版局
- 2) 内閣府 2006『平成 18 年版 食育白書』時事画報社
- 3) 内閣府 2007『平成 19 年版 食育白書』時事画報社、
- 4) 全国時間量編 1990「国民時間調査」NHK 放送文化研究所
- 5) 総務統計局 外食産業統計資料集 1992「平成 3 年度社会生活基本調査結果と概要」92、
- 6) 和辻他 1992「女子短大生の調理教育における研究」甲子園短期大学紀要 No.11 15
- 7) 中村喜代美 1994「本学の調理教育に関する研究 (1)」北陸学院短期大学紀要 No.26
- 8) 中村喜代美 1996「本学の調理教育に関する研究 (3)」北陸学院短期大学紀要 No.28
- 9) 厚生省編 2008「国民栄養の現状 平成 17 年度版」第一出版 49